

大学院の紹介 (1)

● 大学院を紹介します

青山学院大学院文学研究科は、キリスト教信仰に立脚し、人類の知的・文化的遺産を踏まえて、高度で専門的な学術研究を進め、人間と社会に対する深い洞察力と専門研究能力・専門職能力を備えた人材の育成を目指しています。英米文学専攻では、英語圏の言語・文学の同時代的かつ歴史的な専門研究を行い、人文学の伝統的な教養と批判精神を身につけて社会に貢献するとともに、国際社会にも寄与できる人材の育成を目的とし、博士課程前後期を通じて国際的レベルでの研究を志向し、専門の研究者を養成すると同時に、国内の種々の局面でハイレベルの英語教育にも貢献できる人材を養成することを教育理念としています。

英米文学専攻（前期課程）では、以下のディプロマポリシー（修了認定・学位授与の方針）を定めています。

①知識・技能

英語圏の言語・文学の専門的研究を行うのに必要な高度な英語の運用能力を身につけている。専門的な分野、つまり英文学、米文学、英語学、英語教育学、コミュニケーションにおける幅広い知識を得ている。

②思考力・判断力・表現力

英語圏の文学・語学・文化にわたる問題を発見し、その解決を学問的手続きによって導き出し、その成果を英語で表現できる、またはそれに代わる課題研究を行うことができる。

③意欲・関心・態度

英語圏の文学・語学・文化に関する知識を積極的に吸収し、今ある問題に深い関心を寄せて、真理を求めて学問的に偏りのない態度で研究成果を出すことができる。

これらの方針のもと、英米文学専攻では、英文学、米文学、英語学、英語教育学、コミュニケーションの分野で、豊富できめ細かい指導とカリキュラム編成がなされています。また昼夜開講制を行い、従来の1時限～5時限の時間割に加え、6時限（18:30～20:00）を設けており、昼夜にわたって幅広く授業科目を履修できます。また、大学院英文学専攻課程協議会（英専協）に加盟する他11の大学院（上智、聖心女子、津田塾、東京女子、東北学院、東洋、日本女子、法政、明治、明治学院、立教）で委託聴講生として修得した単位は、10単位を限度として修了要件単位に算入できます。特に、コミュニケーション分野においては、言語使用者の諸属性を含めたコンテキストの中での言語現象に関する研究、通訳理論研究や通訳訓練の英語教育への応用、英語話者の言語・非言語コミュニケーションの分析など、多様な演習と講義を開講しています。

	授業科目	単位
基礎科目	基礎演習(1)Ⅰ 基礎演習(2)Ⅰ・Ⅱ	2 各2
専門科目 英文学	イギリス詩A研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ イギリス詩B研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ イギリス小説A研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ イギリス小説B研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ イギリス小説C研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ イギリス小説D研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ イギリス演劇A研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ イギリス批評A研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ	各2
専門科目 米文学	アメリカ詩A研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ アメリカ小説A研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ アメリカ小説B研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ アメリカ小説C研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ アメリカ小説D研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ アメリカ小説E研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ アメリカ小説F研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ アメリカ演劇A研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ	各2
専門科目 英語学	音声学研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ 音韻論研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ 英語統語論研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ 英語意味論研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ 文法論研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ 古・中英語研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ 英語史研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ 第二言語習得論研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ	各2
専門科目 英語教育学・ コミュニケーション	英語教育論研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ 初等英語教育論研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ コミュニケーションA研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ コミュニケーションB研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ コミュニケーションC研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ コミュニケーションD研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ コミュニケーションE研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ コミュニケーションF研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ コミュニケーションG研究Ⅰ・Ⅱ、同演習Ⅰ・Ⅱ	各2
専門科目	Thesis WritingⅠ・Ⅱ	各1
研究指導	研究指導演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	各2

● コラム：「大学院とは？」

大学院とは何でしょう。大学院とはどんなところでしょうか。私たち英米文学科の大学院を例にとってお話するのがよいでしょう。というのも、実は、私たちの大学院「英米文学専攻」は、文学部英米文学科を教えている同じ教員が、この大学院も担当しているのです。したがって、私たちにとって、文学部英米文学科と大学院英米文学専攻は不可分の教育現場なのです。

さて、大学院とは、に対する、まず形式的な答え。文学部英米文学科を4年間の勉強のち卒業して、さらに専門的に勉強や研究をしたいと考える人が進学するのが「大学院文学研究科博士前期課程」です。以前は、「博士前期課程」と言わず、「修士課程」と言っていました。在学は標準2年（優れた研究業績を挙げた場合、1年以上在学すれば足ります）。修了すると修士の学位が授与され、あなたには修士（文学）という肩書が付きます。その後、さらに深く専門性を高めた研究をし、その分野の研究者としての将来も展望したい、と決意し進学するのが「大学院文学研究科博士後期課程」です。以前は「博士後期課程」と言わず、単に「博士課程」と言っていました。修業年限は標準3年。修了すると博士の学位が授与され、あなたには博士（文学）又は博士（学術）という肩書が付きます。以上が大学院の形式的な概要です。もちろん大学院においては、修了すること自体が大変なことですが、それは何故かという、立派な研究をしなければならないからです。そこで、次に中身の話が続きます。（以下、便宜的に修士課程・博士課程という言い方も用いることにします。）

形式的な説明のあとは、大学院とは、に対する答えとしてその中身を簡単に説明しましょう。しかしその前に、学部で4年間でみなさんはどんなことを学んできたはずであるか、を確認しておきたい。英米文学科の4年間を通じて、英文学やイギリス文化、米文学やアメリカ文化、グローバル文学やその文化、英語学、コミュニケーション、英語教育学などさまざまな専門領域について学び、知識を得、あるいは実地に諸体験をし、技術を習得してきたことと思う。「英語」を共通項として、目くるめくような、さまざまな未知の世界を垣間見て体験してきたはずである。

そう、まさに学部時代の勉強は、一言で要約すれば、未知の世界つまり「知らなかった」ことを「教えてもらった」というものなのである。では、大学院は学部と何が違うかといえば、もちろん教えてもらうこともあるが、何より、自ら学ぶことができなくてはならない。ここが一番の違いです。自分で問題を発見し問いを提起し、文献や資料を自分で探し読み分析をし、それまで以上の代案あるいは新説、すなわちその分野の学問世界にとって新たな知見を提出しなければならない。これには筋書はありません。教員は助言はできますが、学部の卒業論文のように、手とり足をとりに指導してくれません。では、博士課程、つまり博士後期課程に進む人にはどのようなことが求められているのでしょうか。博士課程進学者は、修士課程よりもさらに広く深い専門的知識を自身の学問的独創性で縦横に活用して、その学問世界の先端となるべき研究を進められなければなりません。これをわかりやすくたとえるならば、修士課程では、指導教員は傍に立っているコーチでしたが、博士課程においては、指導教員はいわば打ち負かすべき仮想敵といってもよいでしょう。指導教員の知っていることを並べただけでは博士課程の研究にはなりません。指導教員も降参するような、斬新な、時には学問的常識をも覆すような、もちろん十分に納得のいく裏付けを持った研究、そういった研究をして欲しい。これが博士課程の研究の中身と言ってもよいものです。一口に大学院といっても、修士課程と博士課程では、やはりその性格に違いがあるのです。

わが大学院の英米文学専攻は、文学語学を始め、英語教育学やコミュニケーションを含め、およそ英語研究のほとんどの分野を網羅しています。そこからは高い専門性を備えた人たちが巣立っており、あるいは実務家として、あるいは教育者として、あるいは研究者として、社会の各層で欠くべからざる貢献をしています。そして、今もそのような人たちが続いており、これからもずっと続いていくと私たちは信じています。